

New Face

齋藤 靖之 (宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部)

2008年3月に東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻で博士号を取得した齋藤靖之(さいとう やすゆき)と申します。宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部(以下宇宙研)で取得したといったほうが正確かもしれません。博士論文のタイトルは「A Study on the Heat Flow of the Moon: Detailed analysis of the Apollo dataset and implications for the lunar heat flow value(月熱流量に関する研究: アポロデータの詳細解析と熱流量値の推定)」でした。この研究の主たる部分は、以前遊星人にまとめましたので[1]、ここでは自分自身についてなど、くだけた話をさせていただきます。

僕の学生時代の生活スタイルを一言で言うと、「浮気性」でした。誤解を招かないために説明を加えさせていただくと、そのとき興味のあることにふらりと傾き、また別のことに興味を持つとまた傾き、といった様子でした。これは研究生活でも全く同じで、特にD1の時は多くの学会発表をさせていただきましたが、1つのテーマは1回発表したらそれで終了、次の発表では違うテーマで話をする・・・といった様子でした。D3になっても相変わらずで、博士論文の仕上げに本腰を入れたのは、秋の学会(2007年9月@高知大学)が過ぎてからのことでした。最後は指導教官だった田中智先生に大変な負担を強いる結果となってしまい、これにはさすがに反省しております。ごめんなさい。

この浮気性は私生活でも変わらずでした。M1になったばかりのころ、Linuxやネットワークについて少々かじった際、それが面白くなってしまい、研究そっちのけでFirewallを作ってみたり(ごくごく簡単なものですが)、Excelなどを使ったほうが簡単な作業でもShell Scriptでこなしたり、はたまた君が作る宇宙ミッション[2](以下きみっしょん)に熱を入れてみたりしていました。きみっしょんとは、高校生を対象とした体験学習で、宇宙研に在籍する大学院生が



T.A.として彼らのサポートをします。僕もT.A.として(最終的には運営サイドとして)参加し、宇宙研内で横断的な人間関係も築くことができるなど、有意義なものでした。

きみっしょんが影響したかどうかはわかりませんが、D1とD2の2年間、とある私立高校に数学教師として勤めていました。高校3年生も受け持ち、それなりに準備をして授業に臨んでいました。しかし、少なからず身に覚えのある方がいらっしやると思いますが、一部の生徒たちは折を見て授業をさせまいと目論んでいます。普段はそれでも何とか授業をこなすのですが、2006年8月にIAUで冥王星が惑星の定義から外された際(詳しくは[3]など参照)、生徒たちからこの話題を振られ、授業そっちのけで授業時間を全て使い、太陽系の解説だけで終えてしまったことがありました。ただ、こちらはあまり反省をしていません。週に16コマもの授業を担当しながら研究をするのは、体力的に厳しい面もありましたが、上記のような楽しい経験、指導教官と勤務先の両方の理解があり、またよい研究テーマに巡り合えた幸運もあって、無事に学位を取れたと考えています。もはや田中智先生には頭が上がりません。

最後に、その指導教官について話をしたいと思います。私は“実質的な”指導教官として修士時代は水谷

仁先生(現Newton編集長),そして博士時代は田中智先生の指導の下で研究をしていました。しかし書類上は、ずっと加藤學研究室に所属していました。(惑星科学分野の)大学院生として、宇宙研で研究するには、実はいくつか方法があります。主として東京大学あるいは東京工業大学の学生として、指導教官に加藤學先生を選ぶ方法で、現状では他の先生を選ぶ選択肢はありません。ちなみに最近、田中智先生の下で研究をした学生は、毎年4月に事情を知らずにやってきた学生を、(主に僕が)ヘッドハンティングしていました。

加藤研究室では、主に衛星搭載用のX線分光器の開発をすすめてい(ると僕は思っ)ています。それは必要なことなのですが、残念なことが1点あります。それは新しくM1として入ってくる学生の多くが、自分は開発をやるんだ、と思っ(て)やって(く)ることです。それ自体は何の問題もないのですが、宇宙研・固体惑星系の特殊な事情を知るはずもなく、他の研究室を選び、別の研究テーマを持つという選択肢を知らないことが少なくありません。これが学生が少ない1つの要因な

のかもしれませんが。

現在、固体系では加藤、藤村、田中、安部、岩田、岡田研究室と多くの研究室があるにもかかわらず、在籍している学生は10名以下です。ただ学生の理系離れが進んでいることは、昨今の新聞等でもよく報道されており、学生数の減少は固体惑星系だけの問題ではないと思います。そして惑星科学は、観測そして何より探査がなければ、先に進むことが難しい学問です。今後も惑星探査を継続していくために、そして惑星科学を盛り上げていくためにも、固体惑星系のスタッフそして惑星科学会の皆さまには、今まで以上に学内外にそして一般に向けてその意義を広く伝え、惑星科学を志す学生を増やし、そして鼓舞していただければと考えています。

- [1] 斎藤靖之, 2007, 遊星人 Vol. 16. No. 2, 158.
- [2] 阿部新助, はしもとじょーじ, 2003, 遊星人Vol. 13. No. 3, 165.
- [3] 渡部潤一, 2006, 遊星人Vol. 15. No. 4, 142.

大野 宗祐(岡山大学地球物質科学研究センター)

皆様こんにちは。2005年3月に東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻にて博士号をいただきました、大野宗祐と申します。現在は、鳥取県東伯郡三朝町の岡山大学地球物質科学研究センターにて研究員をしております。昨层高知大学で行われました惑星科学会秋季講演会の懇親会にて、新婚ということで紹介していただき、会津大学の出村先生とともに目立っておりますのが私です。祝福してくださいました皆様、どうもありがとうございました。

私は現在、天体衝突現象とそれによる気体生成・放出の実験的研究に力を入れています。そもそも衝突実験に興味を持ったのは東京大学理学部地球物理学科の学生のころでした。はじめは漠然と惑星科学の研究をしたいとは思っていましたが、一方で室内実験を、特に既存の試料を分析するのではなく、条件を制御して自分でいろいろな現象を起こしてみるような実験をやりたいと考えていました。そのうちに、天体衝突や衝突実験はなんとなく派手そう?で面白そうだと



思うようになり、天体衝突は惑星の進化の過程で非常に重要な物理過程である、であるとか、天体衝突は惑星科学の中で最もダイレクトに地球科学に適用・貢献できるテーマの一つでないか、などと理論武装を試みるようになり、ついに現在まで天体衝突と仲良く暮らして(く)るということに相成ったわけです。

大学院は東京大学の地球惑星科学専攻に進みました